

# CONTENTS

## 現場に役立つ日本語教育研究 3 目次

まえがき 石黒圭 iii

### 第一部 正確で自然な日本語で書く

- 第1章 正確で自然な立場の選び方(庵 功雄・張 志剛) ..... 3
- 第2章 正確で自然な時間の示し方(庵 功雄・宮部真由美) ..... 19
- 第3章 正確で自然な判断の表し方(永谷直子) ..... 37
- 第4章 正確で自然な複文の組み立て方(庵 功雄・宮部真由美) .. 57
- 第5章 正確で自然な句読点の打ち方(岩崎拓也) ..... 75

### 第二部 流れがスムーズな日本語で書く

- 第6章 流れがスムーズになる指示詞の選び方(金井勇人) ..... 99
- 第7章 流れがスムーズになる情報構造の作り方(劉 洋) ..... 119
- 第8章 流れがスムーズになる接続詞の使い方(俵山雄司) ..... 141
- 第9章 流れがスムーズになる序列構造の示し方(黄 明侠) ..... 159
- 第10章 流れがスムーズになる視点の選び方(末繁美和) ..... 179

### 第三部 説得力のある日本語で書く

- 第11章 説得力のある段落構成の組み立て方(宮澤太聡) ..... 199
- 第12章 説得力のある全体構造の作り方(石黒 圭) ..... 225
- 第13章 説得力のある例・根拠・たとえの示し方(新城直樹) .... 245

あとがき 山内博之 261

執筆者紹介 269

# まえがき

石黒 圭

本書を手にとられた方は、現在作文指導を担当され、苦勞されている方、これから作文指導を担当することになり、途方に暮れている方が多いのではないだろうか。本書は、そうした方々を対象に、作文指導の方法について明確な指針をお示しすることを目指す論文集である。

「私は日本語教育に携わっています」ということを友人に話せる人は多くても、「私は作文指導に携わっています」ということは友人に隠しておきたい人が多いのが現状であろう。「あなた、そんなに文章上手だったっけ」や、「作文の先生なら、あなたの書いた文章を一度見てみたいわ」などといった恐ろしい言葉を引き出しかねないからである。

文章を書くということについては、私たちはみな、スネに傷を持つ身である。学習者だけでなく、指導する教師も、作文を書くことに不安を抱えている。しかし、教師が作文指導に不安を抱えていると、よい教育はできない。学習者の作文不安を解消するには、まずは教師が自分自身の作文不安を解消する必要がある。

教師の作文不安を解消するために、本書では三つの考え方を紹介する。

一つ目の考え方は、学習者の作文の全般的な傾向を知ることである。作文指導を担当する教師は、添削という作業をとおして学習者の作文の実態を把握する。もちろん、それは重要なことであるが、添削はつねに場当

たりの作業であるため、まとまった作文を一定の観点から総合的に分析するという別の作業が欠かせない。添削は質的な作業なので、学習者の量的な傾向を知るのには不向きである。

そこで、本書では、日本語母語話者、中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者がそれぞれ書いた計180本の作文を対象にする。コーパス言語学が発達している現在、大量というほどではないが、それでも、学習者の作文の傾向を知るためには参考になる分量の作文群であろう。これを、13名の執筆者がそれぞれ専門とする観点から丁寧に学習者の傾向を分析していく。それによって、学習者の作文の全体的な傾向が鳥瞰できると同時に、日々の添削作業で見落としてきた新たな観点到気づくことが期待できる。

教師の作文不安を解消する二つ目の考え方は、指導のためのシラバスを考えるということである。これまでの作文指導は比較的小短文のなかで行われることが多く、研究の対象となる学習者の作文コーパスも400字や600字など、短い作文が多かったのが現状であった。今回、本書の執筆のために構築されたJCK作文コーパス (<http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/>) は、JLPTのN1相当以上の力を持つ学習者を対象に、2,000字以上の分量で書いてもらったものである。また、ジャンルも説明文、意見文、歴史文(正確には時間の流れを意識した時系列文)という三つのジャンルを設けた。こうしたジャンル横断的な長い作文のコーパスを参考にすることで、上級レベルに必要な文章構造の意識やレジスターへの配慮が視野に入るようになり、初級、中級、上級という学習者の成長過程を縦断するシラバスの作成が可能になった。

私たち教師は、どうしても学習者の「今」とだけ向きあってしまいがちである。それも必要なことであるが、成長過程に沿ったシラバスを私たち教師が心の物差しとして持っていれば、学習者の「今」を相対化し、学習者の将来の長い成長過程を意識しながら、ポイントを絞って集中的に指導することが可能になる。作文シラバスという名の物差しが教師の手に入れば、未来につながる成長過程のなかで、現段階で学習者に指導すべきことが自ずと決まってくるだろう。

教師の作文不安を解消する三つ目の考え方は、指導の項目を整理すること

である。不慣れな作文教師の場合、学習者の作文教育の最終目標を自然な日本語で書けることに置いてしまいがちである。もちろん、それは一つの見識であり、間違っているわけではないが、狭すぎるように思われる。

本書は、そのタイトル『わかりやすく書ける作文シラバス』が示しているように、読み手に優しい文章が書けるようになることを最終目標に置いている。自然な日本語で書けることは、学習者のみの目標であるが、読み手に優しい文章が書けることは、学習者と母語話者、共通の目標である。自然な日本語で書けることを目指すと、学習者の到達目標は母語話者になるが、実際には学習者のなかでも高い運用能力を持つ者はかなり多く、アカデミックな世界やビジネスの世界など、日本社会のなかで母語話者と伍してやっていく力を持つことを目指している学習者も少なくない。そうした志の高い学習者のさらなる成長を促し、学習者と母語話者に共通の目標を設定することで、日本語教育の作文教育の水準を引き上げたい。私たちはそんな思いで、本書を執筆した。

そのために、本書では「読み手に優しい文章」の条件を三つ設定した。

- ①正確で自然な日本語
- ②流れがスムーズな日本語
- ③説得力のある日本語

①正確で自然な日本語は、誤解や違和感を与えない日本語で、おもに文法面のルールを考える。②流れがスムーズな日本語は、文連続や文章構成が明快な日本語で、おもにテキスト面の結束性を考える。そして、③説得力のある日本語は、情報の示し方が首尾一貫している日本語で、おもに内容面の一貫性を考える。

この三つの条件を満たす「読み手に優しい文章」を、作文コーパスを生かした日本語学的な分析で明らかにし、それをシラバスとして提示する。こうしてできた物差しが、作文教師のみなさまの指導のよりどころとなることを、執筆者一同、心から願っている。

2017年11月 執筆者を代表して  
石黒 圭

第一部

# 正確で自然な日本語で書く

この第1部では、「正確で自然な日本語を書く」ことを考える。第1部で扱うのは、学習者の作文に出現する文法面の困難点であり、読み手に誤解や違和感を与えない日本語を目指す指導法を検討する。具体的には、ボイス、テンス・アスペクト、モダリティ、複文、句読点を対象にする。

第1章「正確で自然な立場の選び方」(庵功雄・張志剛)では、学習者の作文に出現するボイスの表現を考える。受身と使役を中心に、使役受身、授受表現、自他動詞などについて検討する。

第2章「正確で自然な時間の示し方」(庵功雄・宮部真由美)では、学習者の作文に出現するテンス・アスペクトの表現を考える。「ている」「ていた」の考察を中心に、「ている／ていた」「る／ている」「た／ていた」の区別、さらには「てくる」や「受身＋ている」との異同についても検討する。

第3章「正確で自然な判断の表し方」(永谷直子)では、学習者の作文に出現するモダリティの表現を考える。作文に頻出する「思う」を中心に、無標、「だろう」「思っている」「思われる」「言える」「のではないだろうか」など、広い意味での判断に関わる諸表現について検討する。

第4章「正確で自然な複文の示し方」(庵功雄・宮部真由美)では、学習者の作文に出現する複文の表現を考える。従属節の基本的な形式について、その使い分けの偏りを検討する。

第5章「正確で自然な句読点の打ち方」(岩崎拓也)では、学習者の作文に出現する句読点の表現を考える。とくに読点に焦点を当て、「南モデル」を参考に、従属節の独立度の関連で読点の打つべき位置を検討する。

## 第 1 章

# 正確で自然な立場の選び方

庵 功雄・張 志剛

### 1. はじめに

この章ではボイスの表し方について述べる。ボイスを「立場」ととらえた場合、通常これに含まれるのは、受身と使役である。ボイスが正確に表せないと、文の内容の把握が困難になることが多い。

この章では、次の課題について、データの分析結果に基づいて述べる。

- (1) 日本語学習者にとって、ボイスに関する困難点は何か。
- (2) 日本語学習者が、日本語習得のどの段階で、ボイスについて何をどのように学ばよいか。

以下、**2.**では先行研究とこの章の意義、**3.**では分析方法を述べる。**4.**では日本語母語話者（以下、母語話者）と日本語学習者（以下、学習者）のボイスの使用実態に関する調査結果を示し、いくつかの点に着目し分析する。それに基づき、**5.**ではレベル別のシラバスを示す。**6.**ではこの章のまとめを行う。

### 2. 先行研究とこの研究の意義

受身と使役に関する先行研究は非常に多いが、両者の定量的側面について述べたものに、庵 (2014) と森 (2012) がある。

庵 (2014) は名大会話コーパスと新書コーパスにおける受身の使用頻度を比較したもので、調査結果から次のように述べている。

## 第2章

# 正確で自然な時間の示し方

庵 功雄・宮部真由美

### 1. はじめに

この章では時間の表し方について述べる。時間を表す表現にはテンスとアスペクトがあるが、この章ではアスペクト、その中でも「ている」と「ていた」を中心に分析を行う。それは、「ている／ていた」の正確な使い方は上級(以上の)学習者でも難しいからである(高梨・斎藤・朴・太田・庵 2017)。

この章では、次の課題について、データの分析結果に基づいて述べる。

- (1) 日本語学習者にとって、アスペクトに関する困難点は何か。
- (2) 日本語学習者が、日本語習得のどの段階で、アスペクトについて何をどのように学ばよいか。

以下、**2.**では先行研究とこの章の意義、**3.**では分析方法を述べる。**4.**では日本語母語話者(以下、母語話者)と日本語学習者(以下、学習者)のアスペクトの使用実態に関する調査結果を示し、いくつかの点に着目し分析する。それに基づき**5.**ではレベル別のシラバスを示す。**6.**ではこの章のまとめを行う。

### 2. 先行研究とこの研究の意義

アスペクトの研究は膨大な数に上るが、学習者言語におけるアスペクトを扱ったものはそれほど多くない。その中で、寺村(1984: 143-146)の議論は



## 第3章

# 正確で自然な判断の表し方

永谷直子

### 1. はじめに

たとえば、「彼は来る」ことを断定するときには「彼は来る。」と書き、断定を避けるときには「彼は来るだろう。」と書く、といったように、書き手は自身の判断をさまざまな言語形式を使い分けながら表現する。書き手の判断を表す言語形式はモダリティと呼ばれ、判断を適切に表現するためには、このモダリティを正確に使い分ける必要がある。それでは、日本語学習者が判断をより正確に、かつ、自然に表現するためには、どのような言語形式の習熟を目指すべきなのだろうか。この章はそれを明らかにすることを目的とし、次の(1)(2)について考察を行う。

(1) 学習者と日本語母語話者が用いるモダリティに違いはあるか。

(2) どのような指導を行えば、より正確に判断を表すことができるか。

ここでいう“正確さ”とは、読み手が理解に過剰な負担を感じたり、書き手の意図を誤解したり、(書き手が意図しない)ネガティブな印象を受けたりせず、書き手が意図する判断を理解できることを意味する。(1)で学習者が用いるモダリティにはこの“正確さ”を欠く場合があることを示し、それを克服すべく(2)を提案する。

以下、2.では、先行研究を概観しこの研究の意義について論じる。3.で分析方法について説明し、4.でその結果を示す。5.ではその結果をもとに

## 第4章

# 正確で自然な 複文の組み立て方

庵 功雄・宮部真由美

### 1. はじめに

この章では複文の組み立て方について述べる。複文にはさまざまなものがあるが、この章では、それらを大きく意味的に分類し、意味の種類ごとの分布と、類型内の相互の使い分けについて分析する。また、複文は文の長さとも関連するため、この観点からも分析を行う。

この章では、次の課題について、データの分析結果に基づいて述べる。

- (1) 日本語学習者にとって、複文に関する困難点は何か。
- (2) 日本語学習者が、日本語習得のどの段階で、複文について何をどのように学ばばよいか。

以下、**2.**では先行研究とこの章の意義、**3.**では分析方法を述べる。**4.**では日本語母語話者（以下、母語話者）と日本語学習者（以下、学習者）の複文の使用実態に関する調査結果を示し、いくつかの点に着目し分析する。それに基づき**5.**ではレベル別のシラバスを示す。**6.**ではこの章のまとめを行う。

### 2. 先行研究とこの研究の意義

複文の研究の代表的なものに南（1974、1993）がある。ここで提案されたA類～D類の階層構造は「南モデル」とも呼ばれ、日本語統語論の重要な成果となっている。南モデルをめぐるのは、田窪（1987）、野田（1989、

## 第5章

# 正確で自然な 句読点の打ち方

岩崎拓也

### 1. はじめに

日本語教育における作文の授業の中で扱われる項目は、作文における表現方法や構成などに関する項目が主であり、句読点が学習項目として取り上げられることはあまりない。また、学習者が宿題として書いた作文に対する日本語教師の添削は、原稿用紙の使い方や文と文のつながり、文法的な誤用に対するものがほとんどではないだろうか。これは、豊富にある語彙や表現の誤用に比べて、句読点は「、」と「。」だけであるため、学習者も日本語教師も重要視していないのだろう。だが、実際に日本語学習者が書いた作文を読むと、句読点が適切でないためか、どこで文が区切れているのかわからなかったり、区切りが多すぎて煩わしさを感じたりすることがある。私の経験から言っても、これらは学習者の個人的な問題ではなく、学習者共通の問題であると考えられる。

そこで、この論文では句読点の規範性を示すための最初の試みとして、複文を対象に日本語母語話者と日本語学習者がそれぞれ構造的な読点を打っているか、分析を行い、それを指導法に還元することを目指す。具体的には、以下の2点を明らかにすることを目的として分析と考察を行う。

- (1) 複文において、日本語母語話者と日本語学習者が構造的に句読点を打っているのか。

第二部

# 流れがスムーズな日本語で書く

この第2部では、「流れがスムーズな日本語で書く」ことを考える。第2部で扱うのは、学習者の作文に出現するテキスト面の困難点であり、文連続や文章構成が明快な日本語を目指す指導法を検討する。

第6章「流れがスムーズになる指示詞の選び方」(金井勇人)では、学習者の作文に出現する指示詞の表現を考える。コ系の指示詞とソ系の指示詞の文脈指示用法の使い分けを中心に、記憶指示のア系の使用法などについても検討する。

第7章「流れがスムーズになる情報構造の作り方」(劉洋)では、学習者の作文に出現する情報調整の表現を考える。とくに、後続文脈への情報の継続という観点を中心に、「AのはBだ」という八分裂文を中心に検討する。

第8章「流れがスムーズになる接続詞の使い方」(俵山雄司)では、学習者の作文に出現する接続詞の表現を考える。基本的な接続詞の使い方を中心に、接続詞の文体的な側面や、「のだ」のような文末の接続詞相当表現についても検討する。

第9章「流れがスムーズになる序列構造の示し方」(黄明侠)では学習者の作文に出現する序列の接続表現を考える。「まず」「次に」「さらに」を中心に、数字を含む序列の接続表現などのバリエーションについても検討する。

第10章「流れがスムーズになる視点の選び方」(末繁美和)では、学習者の作文に出現する視点の表現を考える。授受表現や受身表現を中心に、視座の統一について検討する。

## 第6章

# 流れがスムーズになる 指示詞の選び方

金井勇人

### 1. はじめに

書き言葉では、基本的にはコ系（この）とソ系（その）が使われる。その使い分けについて、庵（2007）は以下のように分析している。

- （1）「この」はテキスト送信者（話し手／書き手）が先行詞をテキストのトピックとの関連性という観点から捉えていることを示すマーカーである。
- （2）「その」はテキスト送信者が先行詞を定情報名詞句へのテキストの意味の付与という観点から捉えていることを示すマーカーである。  
（庵 2007: 103）

この章においても「この」「その」の基本的性質を上記のように考える。

一方、書き言葉では、基本的にはア系（あの）は使われないが、皆無ではない。黒田（1979: 56）によると、ア系による指示の特徴は「対象を…直接的知識の対象として指向する」ことであり、金水・田窪（1992: 189）では、直接経験領域にある対象を指す、と定義される。

- （3）（独り言）あの時計、どこにしまったかなあ。（作例）  
この話し手にとって、「あの」で指す「時計」は、直接的知識の対象として指向されている。これは言い換えると、記憶内の対象（時計）を指すということであり、ア系の機能は「記憶指示」と言うことができる。

## 第7章

# 流れがスムーズになる 情報構造の作り方

劉 洋

### 1. はじめに

日本語で作文を書くとき、同じ情報を伝達するのに異なる文型を選択することによって、読み手にとって情報がスムーズに流れていると感じられるものと、そうでないものがある。例えば、次の(1)と(2)は同じ意味を表しているが、情報構造が異なっているため、読み手にとって(1)と(2)の理解のしやすさが異なる。

- (1) 自分が本を読んで、その中で衝撃的な美しさを感じ、新しい知恵の世界に足を踏み出すきっかけになったら、それだけで文章は、そしてその文章で作られた本は自分なりの意味を獲得する。独特な読み方だと考えられるかもしれないが、このように読む方法もある。皆が共有する知識を探すのも大事である。むしろこういう読み方こそ、本が持つ一番基本的な意味である。しかし自分なりの知恵を探して、そこから本の知恵の美しさを発見する知恵の探検も、私にとっては決して見逃さない楽しみである。高校の以来、今まで読書を趣味にしている理由も、この独特な読み方の快感を知ってしまったのである。(k10-3)
- (2) 自分が本を読んで、その中で衝撃的な美しさを感じ、新しい知恵の世界に足を踏み出すきっかけになったら、それだけで文章は、

## 第8章

# 流れがスムーズになる 接続詞の使い方

俵山雄司

### 1. はじめに

接続詞は、文と文、あるいは段落と段落とのつながりを示す手段の1つである。接続詞が適切に使用されれば、文章の流れがスムーズになり、読み手は文章の内容を正確に読み取ることはもちろん、内容が今後どう展開するかを適切に予測できたりする。逆に、接続詞が適切に使用されなければ、読み手は文章の読解の際に、大きなストレスを感じることになる。

この章では、この接続詞を対象とした調査により以下の点を明らかにする。

- (1) 文頭の位置において、日本語母語話者と日本語学習者の接続詞の使用にどのような違いがあるのか。
- (2) 学習者が、日本語習得のどの段階で、接続詞について何をどのように学べばよいのか。

以下、**2.**では先行研究とこの章の意義、**3.**では分析方法を述べる。**4.**では、日本語母語話者と日本語学習者の接続詞の使用実態についての調査結果を示し、いくつかの点に着目して分析する。それに基づき、**5.**ではレベル別のシラバスを示す。**6.**でこの章のまとめを行う。

### 2. 先行研究とこの研究の意義

まず、接続詞の使用実態についての研究のうち、同条件で日本語母語話者



## 第9章

# 流れがスムーズになる 序列構造の示し方

黄 明侠

### 1. はじめに

日本語で作文を書くとき、文章の論理展開をはっきりさせるため、「まず」「次に」「最後に」「第一に」「第二に」などの序列の接続表現がよく使われる。しかし、これら一見簡単そうに見えるものでも、日本語学習者が実際に書いた作文を読むと、その選択の誤りや適切な位置にないなどの問題で、読み手にとって文章の全体構造が却って把握しにくくなることも少なくない。石黒 (2005: 48) が、「序列の接続語の不適切な組み合わせという問題は、日本語学習者固有の問題であり、これが学習者の作文を読みにくくしていることが多い」と指摘する通りである。また、私自身が行った調査 (黄 2013) でも、序列の接続表現の文法面での不適切さ、形態面での不自然さ、その出現位置や組み合わせなどの問題が、日本語母語話者に比べて中国語母語話者に明らかに多く、それが読み手の文章理解を阻害し、文章自体の評価を下げることにつながることがわかっている。

そこで、この論文では序列構造の典型的なパターンを示すことを目的とし、序列の接続表現に関して日本語母語話者と日本語学習者がそれぞれ適切に使っているか、分析を行い、どのように指導すれば日本語学習者が正確に使えるようになるか、明らかにすることを目指す。具体的には次のようになる。

(1) 日本語母語話者と日本語学習者がどのように序列の接続表現を使

## 第 10 章

# 流れがスムーズになる 視点の選び方

末繁美和

### 1. はじめに

談話の読みやすさや理解しやすさを左右する要因の1つに、「視点」がある(坂本・康 2008、魏・玉岡・大和 2010)。視点は、「視座(見る場所)」と「注視点(見られる客体)」に分けられ(松木 1992)、注視点は文の主格となる人物から、視座は、授受表現や受身表現など人称制限がある視点表現を構文的手がかりとし、判断される(渡邊 1996)。例えば、「太郎が花子にお金をくれた」という文を例に挙げると、注視点は「太郎」、視座は「花子」となる。田窪(1997)は、日本語では話者の視点がしばしば表層構造レベルで文法的に符号化されるのに対して、英語では視点は副詞や挿入句で表すことを指摘している。中国語、韓国語についても、英語と同様であり、他言語には見られない日本語の特徴であると言える(渡邊 1996)。日本語母語話者の談話では、視点表現により視点が特定の人物に統一されており、主語や目的語が省略されていても、「誰が誰に」という動作の方向性が分かる。一方、日本語学習者の談話においては、視点表現の非用や誤用により、視座が統一されていないことが多くの先行研究で指摘されている(田代 1995、渡邊 1996 など)。しかしながら、どのタスクやジャンルにおいて最も視座の統一の必要性が高いのか、その際にどの視点表現が多く用いられているのかについて、コーパスデータに基づき明らかにした研究は管見の限り見られない。

第三部

# 説得力のある日本語で書く

この第3部では、「説得力のある日本語で書く」ことを考える。第3部で扱うのは、学習者の作文に出現する内容面の問題であり、情報の示し方が首尾一貫する日本語を目指す指導法を検討する。

第11章「説得力のある段落構成の組み立て方」(宮澤太聡)では、学習者の作文に出現する段落を考える。段落の形式と機能を中心に、段落の組み立て方による話題のまとまりから生まれる説得力について検討する。

第12章「説得力のある全体構造の作り方」(石黒圭)では、学習者の作文に出現する視点の表現を考える。文章の項・節・章に当たるまとまりを中心に、予告文による文章の読みやすさから生まれる説得力について検討する。

第13章「説得力のある例・根拠・たとえの示し方」(新城直樹)では、学習者の作文に出現する視点の表現を考える。枚挙的帰納法・アブダクション・仮説演繹法を中心に、内容に合った思考法から生まれる説得力について検討する。

## 第 11 章

# 説得力のある 段落構成の組み立て方

宮澤太聡

### 1. はじめに

一口に「段落」といっても、その用語をどのように理解し、実際の文章作成に運用しているかは、日本語学習者だけでなく、日本語母語話者においてもはっきりとは定まっていない。段落の「構成」とは、文章化する以前のイメージの段階を指すが、今回扱う作文データには、その構成を練る時点で問題が生じているものや、構成をもとに実際の文章を作成するさいに問題が生じているものが見られる。また、段落の改行についても、全く改行のない作文から、改行までが長過ぎるもの、逆に短過ぎるものなど、読みにくさを感じるものが散見される。これらの問題は、個人に帰する部分が大いといえ、日本語学習者にある種の傾向が見られることも事実である。

この章では、説得力のある段落構成の学習方法をシラバスのかたちで提案するために、作文のジャンルごとに日本語母語話者と日本語学習者がそれぞれどのような段落構成で文章を作成しているのかを分析することで、共通する段落構成の型、特有の段落構成上の問題点を明らかにすることを目指す。この章の課題として以下の三つを掲げる。

- (1) 作文のジャンルごとに日本語母語話者に共通する段落構成の類型があるか
- (2) 作文のジャンルごとに日本語母語話者と日本語学習者それぞれに

## 第 12 章

# 説得力のある 全体構造の作り方

石黒 圭

### 1. はじめに

長い文章が書けるというのは、いわば特殊技能である。日本語母語話者であれば、誰でも流ちょうに日本語を話すことができるが、日本語母語話者であっても、長い文章を書けない人は一定数存在する。

ましてや、日本語学習者の場合、長い文章を書くのは困難を極める。そこにはさまざまな問題があるが、最大の問題は、長い文章を書くための文章構成の枠を、頭のなかにぼんやりとしか持っていないことにある。

そこで、この章では、文章全体の構造を決定する、冒頭部に出現する全体構造予告文（以下「予告文」とする）に着目し、日本語母語話者と日本語学習者がそれぞれどのような予告文を使って文章の全体構造を組み立てているか、分析を行い、それを指導法に還元することを目指す。具体的には、以下の2点を明らかにすることを目的として分析と考察を行う。

- (1) 説明文、意見文、歴史文の三つのジャンルにおいて、日本語母語話者と日本語学習者が、どのような予告文を用いているか。
- (2) 日本語学習者の予告文の使用に問題があるとすれば、それはどのような問題か。

その後、学習者のレベル別にどのような指導を行えば、より適切な予告文が示せるようになるかについて、提案を行いたい。

## 第 13 章

# 説得力のある例・根拠・ たとえの示し方

新城直樹

### 1. はじめに

レポート・作文、口頭発表の原稿作成の指導における「例・根拠・たとえ」について、この章ではこれらを以下のように位置づける。

表 1 この章での「例・根拠・たとえ」の位置づけ

「例」とは？	ある主張を裏付ける、通時的ではなく共時的な事実。
「根拠」とは？	ある主張を裏付ける、共時的ではなく通時的な主張または事実。
「たとえ」とは？	ある主張や事実を、それらと類似する別の主張や事実と対比させること。

「例」はある主張を裏付ける共時的な事実とするが、「共時的」とは、同じ時間・時期・時代の中での共通点に基づくものであり、時間や歴史の流れの中での相違点に基づくものではないという意味である。たとえば、「私が生まれた市は、辺鄙な田舎の市なのだろう、と思う方もいるかもしれない」という主張があるとして、それを裏付ける共時的な事実として「私が生まれた町は人口 10 万人に満たない」、などである。ここで「共通点」の意味するところは、複数の具体的な例同士の「共通点」から一般的・普遍的な概念を導き出すということ、つまり「人口 10 万人に満たない」「小さな田畑や林がたくさんある」「都市部から離れている」などの例に共通する概念として